

続・ 珈琲の思い出 29

鈴木優子

それはあたかも和樹の指自身がひとつの生き物みたいに優子の手を味わっているかのような動きだった。優子の手を握るのが嬉しくて嬉しくてたまらない、という気持ちがひしひしと伝わってきた。

な、なんかいやらしい・・・？

和樹さんって真面目そうな見かけによらず、実はエッチな人なの・・・？意外!!

つないだ手をしつこくまさぐられながら、優子は自分の想いを彼に伝えるのは今しかない、と決意を固めた。

「あ、あの・・・和樹さん、わ、私、こんなこと言っているのかどうか分からないんだけど・・・」

なんてことだ、私、緊張してる。口の中がカラカラに乾いて、もう喋れないみたい・・・。この私のだ、大勢の人の前で講演会を行ったり、取引先の役員の前で重要なプレゼンを平気で行ってきた私が、好きな男に向かって、自分の気持ちを伝えることができないだなんて・・・。

優子は胸の動悸をしずめるために、深呼吸を一つ行くと、和樹に向かって一気に話し始めた。(続く)